2012 年 9 月 1 日（土）、日本出版クラブ会館にて第８回「住まいとコミュニティづくり NPO 交流会」を開催しました。
この交流会では、午前中に特定非営利活動法人粋なまちづくり倶楽部（2003 年度、2004 年度の助成対象団体）のご協力を得て神楽坂のまちあるきを実施し、午後は、「住まいとコミュニティづくり活動助成」事業の 2011 年度の助成対象団体による活動報告を行いました。
なお、この記録に掲載しています 2011 年度の助成対象団体の活動報告書と実験プロジェクトのパンフレットは、ご希望の方へ無償で配布しています。

写真　砺波周平（P9 下部 2 枚を除く）

デザイン・制作　梅原デザイン事務所

粋なまち

神楽坂「粋なまち」めぐり

協力:特定非営利活動法人　粋なまちづくり倶楽部

10：00 ― 12：00



4 グループに分かれて、粋なまちづくり倶楽部のメンバーの案内で、神楽坂の魅力的な路地、坂、石畳、町割り、店舗などを巡りました。途中、一時的に雨に降られたこともありましたが、参加者からは、神楽坂らしさの一端に触れることができた、歴史的に形成された町の変遷を知ることができた、といった感想もいただき、無事に終えることができました。





主な見学スポット

光照寺／袖摺坂／アユミギャラリー／赤城神社／兵庫横丁／かくれんぼ横丁／軽子坂／熱海湯階段／見番／毘沙門天　など





まちめぐりの中で、あるグループの参加者から
・なぜこんなに店が多いのか？
・なぜイタリアンが多いのか？
・店先にあるプランターは、何かの助成を受けているのか？
・なぜ古い住宅とアパートが入り混じっているのか？
・なぜこんなに銭湯があるのか？
・路地で火事があった際には消防車は入れるのか？
など、様々な質問がありました。







神楽坂のまちには、他のまちにはない特徴が多いことがわかります。















活動報告

活動報告　第一部　13：00 ー 15：15



1 ゼロダテ／大館展 実行委員会（秋田県大館市）

活動のテーマ：秋田県大館市民による地域資源の映像化と街中映像祭

報告者：石山拓真さん

ゼロダテのテーマソングのミュージックビデオを大館市の中高生が主体的に関わり、制作・編集を行ってイベントで上映した。映像・音楽という中高生にとって興味のあるツールを活用して、まちを再認識することが、将来彼らがまちに戻ってくるきっかけになることを期待している。



2 朝日座を楽しむ会（福島県南相馬市）

活動のテーマ：昭和の香り漂う「朝日座の再生」～まちなかに楽しむ場を！朝日座とともに～

報告者：小畑瓊子さん

東日本大震災と福島第一原発の被害により住民が半減した地域で、「朝日座」を拠点として多彩なイベントを実施し、大学生との協働による朝日座の修理活動を行った。行政や地域内外の若者との連携によって、映画だけにとらわれないまちなかのサロンづくりを目指している。



3 金沢クリエイティブツーリズム実行委員会（石川県金沢市）

活動のテーマ：遊休町家活用型共同工房創出によるコミュニティ活性化

報告者：水野雅男さん

2～30 年後に消失の危機にある金澤町家を対象に、他団体との連携で、町家の所蔵品の展示や清掃、設計コンペ、改修 WS、市民ファンドの検討を行った。美術系の若者の地元からの流失現象や所有者の経済的負担の軽減を念頭に、町家ドミトリーとしての活用を開始している。



4 西淀川から住まいと暮らしを考える環境住宅研究会（大阪府大阪市）

報告者：山本延行さん

活動のテーマ：住工共存のまちで住民参加型環境住宅づくり

公害のまちといわれた地域で、住まいから環境の再生を目指した（地域を 3 ブロックに分けてまちあるきを実施、各々の地域にあった住まい方の提案、耐震補強の検討等）。今後は、老朽家屋の再生、狭小敷地の建替えなど、具体的な住まいづくりに着手する意向である。



5 特定非営利活動法人新田むらづくり運営委員会（鳥取県智頭町）

活動のテーマ：新たな " 結い " による茅葺民家保全と地域活性化の試み

報告者：津田英樹さん

外からの移住者が空き家で廃屋同然だった茅葺民家を個人で購入し、多様な人が集まる社交場として地域に開いてきた。建物を使い続けるためには、茅葺屋根の葺き替えが必要になり、葺き替えのできる職人探しなど 2 年以上前から準備をした上で地域の総事として実施した。



6 特定非営利活動法人旧御師丸岡宗大夫邸保存再生会議（三重県伊勢市）

活動のテーマ：神領伊勢の記憶「旧御師・丸岡宗大夫邸」保存活用事業

報告者：阿形次基さん

かつては地域に 800 あったといわれる御師邸だが、今や長屋門と母屋が残る建物は丸岡邸のみ。団体は伊勢郷土会のメンバーを中心に組織化され、空き家だった建物の清掃、調査、整備を行うとともに、食を絡めた周知イベントなどを実施し、御師の歴史文化を活かした活動を展開した。

活動報告

活動報告　第二部　15：30 ― 18：00



7 特定非営利活動法人蛸蔵（高知県高知市）

活動のテーマ：美術、演劇、映画、音楽。土佐一番の文化の蔵うまれる。

報告者：佐野寛さん

地域資源の藁工倉庫群は、他人任せやノスタルジーだけではいつか取り壊されてしまうと考え、美術、演劇、映画、音楽の 4 団体が NPO を設立し管理運営を開始した。一度外に出ていった若者が帰ってきたくなる活気あるまちとなるように、地元文化を発信するハコとして充実を図る予定。



8 おいもを愛する会（広島県呉市）

活動のテーマ：おいもラブステーション・パワーアップ絆プロジェクト

報告者：谷脇けいこさん

自治会長から提供された 60 坪の畑を利用したじゃがいも、さつまいも、広かんらん（キャベツ）等の栽培、収穫物を利用したイベントの開催を通して地域の絆を深めた。また、芋栽培、畑作りの輪を県外、海外へ広げるなど、前年度の取り組みをさらに増強させた。



9 特定非営利活動法人手仕事舎そうあい（宮崎県都城市）

活動のテーマ：古民家「持永邸」を活かした地域づくり

報告者：蒲生芳子さん

衰退したまちなかで売りに出された歴史ある邸宅を個人で購入した後、NPO 法人を設立して建物の改修 WS 等を行って整備するとともに、カフェ「もちなが邸」として運営を開始した。新たに地域の子育てグループがスタッフに加わり、次世代へ食を繋ぐプロジェクトを始動している。



10 特定非営利活動法人島の風（沖縄県伊是名村）

活動のテーマ：沖縄古民家再生職人養成カレッジ（第 3 回）

報告者：納戸義彦さん

7 世代先の人のことを念頭に置きながら活動を行っている。古民家の改修技術の伝授・人材育成を目的に、島外からの参加者も受け入れて、第 3 回目の職人養成カレッジを実施した。今後も力強く住み続ける誇りを持って、都市に向けて島からの逆襲をしていきたいと考えている。



11 特定非営利活動法人街なか映画館再生委員会（新潟県上越市）

活動のテーマ：【感動の宅配便】世界館キネマデリバリーサービス構築

報告者：関由有子さん　岸田國昭さん

16mm フィルムを活用したキネマデリバリー事業の確立を目指していたが、映画業界の急速なデジタル化に伴い、35mm フィルムを残す活動に移行してきた。世界館を残すことに力点を置くのではなく、映画文化をいかに存続させるかという観点から広域の映画関係の繋がりを作り出しつつある。



12 特定非営利活動法人グローバルヒューマン（滋賀県高島市）

活動のテーマ：農山漁村の街づくりと地方に根付く収益モデル事業構築

報告者：景山信子さん

高島市マキノ地区での実績を活かして、元ホームレス等から成る「再チャレンジ夢工房隊」が、東日本大震災の被災地で復興支援活動に取り組んだ。被災者から新たな家屋の建築依頼を受けたり本格的な復興支援工事を請け負う等、被災地での活動は彼らの大きな自信に繋がっている。



13 白保村ゆらてぃく憲章推進委員会（沖縄県石垣市）

活動のテーマ：ゆいまーるの心で、ゆらてぃく村づくり事業

報告者：前盛綾子さん　上村真仁さん

街並み修景事業を推進するなかで、これまでの活動も含めて事業化を図るために NPO 法人の設立を目指した。他地域の事例の研究、地域資源についての学習などを行い、修学旅行生や被災小学生をモデルツアーとして受け入れた。今年度中に法人化を成し遂げ、観光・交流事業を開始したいと考えている。



14 特定非営利活動法人粋なまちづくり倶楽部（東京都新宿区）

報告者：山下馨さん

江戸時代の街区割が活かされている神楽坂で、地域に縁のある伝統芸能・伝統演芸等の振興をまちなかで行っている。また、神楽坂らしいたたずまいの保全活動として、黒塀づくりの推進、有形文化財登録等、複合的に文化的価値の保全・向上活動を展開している。





実験プロジェクトの報告

実験プロジェクトは、事務局が研究対象団体を選定し、団体と共同で研究・検討を行うものとして 2011 年度から開始した。

2011 年度は、特定非営利活動法人旧御師丸岡宗大夫邸保存再生会議を対象とした。同会議の行っている地域にゆかりの建物の保存・活用は、全国的にも多くのところで実施されており、本活動を対象にすることは他の類似活動の参考になると考えたためである。なお、今回のプロジェクトを進めるにあたり、先進事例である特定非営利活動法人揚輝荘の会（2004 年度、2005 年度の助成対象団体）にもプロジェクトへの参加をお願いした。

本交流会では、揚輝荘の会からもお話しいただいた（実験プロジェクトの説明は、研究成果のパンフレットを配布して行った）。



15 特定非営利活動法人揚輝荘の会（愛知県名古屋市）

報告者：佐藤允孝さん

揚輝荘は松坂屋創業者の別邸で、かつては広大な敷地に各時代の建物が並び、各界の要人が集う社交場で月見の名所でもあった。団体は資金に窮する組織の立ち上り期において、多様な助成金を活用して事業を継続し、市から建物の暫定管理の受託するまでに至った。現在は、来春の指定管理者受託を目指している。

当日いただいた質問の回答。

当日ご記入いただいた質問にお答えします！

金沢クリエイティブツーリズム実行委員会に対して

多大な費用がかかると思いますが、その費用はどう調達するのでしょうか？定期借家でサブリースとのこと、その詳細が知りたいところです。



市からの助成金（金澤町家（昭和25年以前に建てられた木造家屋）の改修　補助）と所有者の自己資金を改修費に充てています。そのうちの所有者出資分は家賃収入から回収します。

例えば、1200万円の改修費の場合、市から600万円、所有者自己資金600万円をあてます。自己資金600万円は家賃月額8万円で6年間掛けて回収されることになります。

今までのところ問題はありませんが、入居者が決まらない、途中で退出するなど、リスクはあります。それに対して、所有者との定期借家の契約期間を短くし、契約更新のときに協議し、リスクの低減を図っています。

特定非営利活動法人新田むらづくり運営委員会に対して

津田さんはなぜ移住されたのでしょうか？



正直なところ自分自身よくわかりません。というか、簡単に説明できるものではありません。さまざまな偶然や必然、その時々の状況が重なり合って智頭町に移ることにしました。移住するまで約10年間、智頭町、とりわけ新田集落の人たちと関わってきており、短絡的な行動ではないと思っています。それだけ惹きつけるモノが新田集落にはあったということでしょうか。今回の活動の場である茅葺民家は、もともとセカンドハウスとして使っていたものであり、何か覚悟を決めて移住した…というような感覚ではないのです。私自身は「単身赴任中！」みたいな感覚でいます。

智頭町外から集落に移住して来る方がいるとのことですが、就業の機会（職）はあったのですか？



就業の場はもちろんあります。就業の場を必ず集落内あるいは智頭町内で確保する、ということにはならないかもしれませんし、希望する職種に就けるということにもならないかもしれませんが、職はあるものです。但し、賃金水準は都市部に比べ、総じて低いです。

集落型 NPOについて詳しく教えてください。外からNPOに参加したいという方はいますか？



細かい経緯は省きますが、国の補助金等によって宿泊施設や飲食施設の設置が決まったときに、その運営主体をどうするかという検討を行いました。任意団体、株式会社、等々を検討する中で最終的にNPOを選択しました。法人格をとったほうが行政等からの支援を受けやすいと考えられること、法人設立が比較的容易であること、さらに「特定非営利活動促進法（NPO法）」が施行された直後で話題性があったという背景もありました。

また、集落では「自分たちのことは自分たちでやって自立しよう」という気風があったこと、施設運営による恩恵は分け隔てなく全員で受ける反面、責任も全員で負うという考えのもと、集落全世帯を構成員としました。NPOはあくまでも集落運営のための手段であり、構成員は集落民です。したがって外部からNPOに参加するということは考えられません。

ちなみに集落に移住してきた世帯については、NPOへの参加は任意としています。

茅葺き以外でも今後、新しい形での「結い＝総事」で実施していく予定、実施したいことはありますか？



集落共有林の維持管理、水利保全、水源地管理、草刈り等々、日常生活にかかわる総事は今もたくさんあります。これらは集落に暮す者の義務であり、疎ましい面があるのは確かですが、世代間で生活技術を伝承したり、コミュニケーションを深め、集落内の結束を固めるという見落としてはならないすぐれた側面があります。地域のコミュニケーションが希薄になっている都市住民にとっては新鮮なものとして映るかもしれません。そのことを踏まえ、イベント性を持った取り組み、例えば共有林の植林や下草刈りなどを集落民だけでなく、新しい形での総事として取り組む価値はあると考えていますし、すでに何度か取り組んでいます。

選考委員のコメント



図司直也氏　法政大学准教授

私自身、選考委員２年目になり、今回ご報告いただいた団体の選考にも関わらせていただいた。それぞれ選考委員の先生がたがご専門をお持ちだが、私自身は農山村や地方の地域づくりの研究を主にしていて、新田むらづくり運営委員会にはちょうどNPO化した直後にお伺いするなど、農山村の中山間地域を巡っている。

今回、色々な地域の取り組みをお伺いして、私自身かなり勉強させていただいたと思っている。農山村や地域づくりの観点から、コメントさせていただく。

コメントの対象となっている３つの取り組みには、色々重なり合う点があると思う。特に地域の資源について、都市・農村部を問わず、どのように維持管理をし、価値を再生し、取り戻していくのか、また時代に合わせたものにしていくのか、というところで様々なアプローチがされていると感じた。

ゼロダテ／大館展 実行委員会

地域の世代交代の橋渡しをどうしていくのかという課題について、次の世代の視点から巻き込んでいくやり方が絶妙だと思った。中学生・高校生の世代の感性を活かして次の世代の目線から、町の価値がどこにあるのかを、ビデオクリップの作成を通して意識している。報告の中で、「彼等は町での関わりや思い出がないと、戻ってきてくれないのではないか」という話があった。次の世代が自分の町を誇りに思って、一度東京など外に出て行っても、またそこに帰ってくるような手当てをされている。よく中山間地域でも誇りの空洞化の話があり、「この地域は、もうやっていけないなら出て行くしかない」というようなことが言われがちだが、この地域は捨てたものではないと考えるきっかけをつくっている点で非常に価値があると思う。

今回の報告ではそこまで踏み込んでいなかったように思うが、参加の場が若い世代から世代を越えて上の世代にも、どのように広がっていくのかという点でも関心を持っている。また、どちらかというとソフトのほうから色々なアプローチをかけていたが、原点の御成座（おなりざ　旧映画館）の再生のプロジェクトに戻ってきたという話があった。そういう意味では、ハード面での取り組みにどのように回帰していくのかという点で興味深い。次のステップに向けてがんばって欲しい。

朝日座を楽しむ会

ゼロダテの取り組みと同様に劇場を再生するという部分に対して、正面から地道にチャレンジしていると感じた。今回の震災でかなり大変な状況にあったと思うが、震災そのものが、逆に劇場がもっていた価値をもう一度見直す機会となっている。災害で大変な時期にありながらも、娯楽の大事さ、そういうものは不可欠だということを再認識する機会を色々な形で作られていた。そういう意味では、ゼロダテさんとは逆に、点から面へという取り組みが、これからどう展開できるか大事になってくる。

色々な取り組みをして、子どもたちの集まる場を作ったが、他の行事と日にちがバッティングしていてうまく集まってくれなかったなど、大変残念だったものもあるが、さまざまなかたちで朝日座が使われる可能性がこれだけ広がっているのだということを、地域に住んでいる皆さんとうまく情報を共有しながら、場作りを広げていくことが次の可能性につながると思った。

また、そこまでの話はなかったが、青年部があり、次の世代が、この場をうまく活用していこうという動きがあったのが興味深かった。

金沢クリエイティブツーリズム実行委員会

資源そのもの、個人の所有物の権利関係に対してどのように立ち向かっていくのかということに関して非常に示唆が多かった。

町家という、ある意味、都市や農山村が共通の課題に抱えている空き家の再生をどうするのかという点に関して、今まで使っていた人たちの立場に立ちながら、次の使い手の間に橋渡しをしていく。それは単に所有といった権利関係だけでなく、使い方の工夫や中身の片付けを通して、それまでの営みの歴史性に対してしっかりリスペクトしながら、そこに新たな価値を加えていくなどすごくうまく手当てされている気がした。これから人口減少時代に入っていくので、おそらく今まで沢山使われた地域資源に、価値を残したり、場合によっては畳まなければいけないものが出てくるが、そういう時の考え方として、色々な形でヒントを与えてくれた事例だったと思う。

前半の事例を通して、HC財団のこの助成は、目立った成果はなくとも、やってきたことに対して価値があると活動のプロセスをしっかりと評価して、さらにバックアップしていくことに力点が置かれていることを感じた。これからの補助金や助成金には、限られた期間で成果がすぐ出ないものに対してもサポートが求められると思うので、この助成は先駆的だと思った。このような交流会の場づくり自体も、各方面に刺激を与えるのだと思う。

選考委員のコメント



高見沢実氏　横浜国立大学教授

私は、日本はこれからどうなるのかということに関心がある。昨今の状況、震災後、リーマンショック後と言うこともあり、若者が夢をもてない日本になってしまってどうしたらよいのかということを、大学で教員をやっているので考えている。例えば、今年の「日本再生戦略」を読んだが、毎年政策が変わっており、これでは夢がもてない。このような中で、発表いただいたお話にはいろいろ触発された。

特定非営利活動法人新田むらづくり運営委員会

話としてはっきりしていて面白いと思ったのは、智頭町と御師邸で、類似する話であったと思う。共通して思うのは、オーナーさんの思いや責任、半分遊び的な要素。やはり智頭町の場合は人柄とあいまって、建物や自分がやっていることに対して非常に愛着をもち、一度やり始めたことはやってしまおうという姿が印象的だった。

先ほどの政策的なことに関連させると、国の政策となるとその思いと打ち出しがうまく合っていないのではないか。概念から入って色々なお金をつけていけば日本は再生するというような発想はうまくいかないはずだと思うのに対して、本日見せていただいたように一軒の家からはじめて、かやぶきの茅を葺き替えてそこから始まるかと思ったら、その前のボロボロな状態からスタートしたことに、自分としては驚きを感じた。

これと決めたことをやるのだという姿を見た周りの人が「共感」したのだと思う。これからの時代、「共感」は一番重要なキーワードだと思う。理屈ではなくて「共感」。俺も一緒にやってみよう。そういう風にウッと前のめりになろうとするときに、ポンと背中を押されて、あなたも一緒にどうぞとまきこまれていく。持続的という意味でも、地方都市・山間部のモデルとして輝ける存在になりつつあるし、今後も担っていけるのではないかと確信した。

西淀川から住まいと暮らしを考える環境住宅研究会

私の専門が都市計画ということもあり、地道な地域での調査活動や住環境改善でいつも風を吹かす震源地は大阪であると注目している。京都というよりも大阪。かつての住環境改善というのも大阪であった。阪神淡路大震災でも、兵庫・大阪から新しいことをしないといけないよという風が吹いてきた。NPO活動などもこのときから盛んになった。そう意味では、西淀川の活動は新しい風を担う一翼であって欲しいという思いで選ばせていただいた。今日お聞きした感じでは、オーナーさんがいてそれを支援する人・楽しんで一緒に活動する人や市役所がいてというタイプの活動とは違う感じがした。ただ残念ながら今日の発表だけでは、どこが活動の中心を担うのかが見えづらかった。選考段階のイメージでいうと、あのように調査し、活動していく中で、ゆくゆくは建物の改修や新しい建て方を提案・普及していこうというストーリーの最初の段階を今回みさせていただいた感じがする。

南海トラフ地震は、今後淀川の 0m地帯のあたりは津波で最も浸水が予想される場所ではないかということが心配だ。今日の話の中で、2階から出入りできる住宅の話があったが、出た先の「緑陰道路」は津波対策になるのではないかと勝手に思ったりした。ある意味で、今日話していただいたことが、方法論として、第1世代（古い住環境の改善の活動）なのか、第 2・3世代（山崎亮さんなどによる、関西で都市計画での新しい仕事の本がベストセラーになっていて、私も含めてファンが多い）の新しい話なのか、見分けがつかなかった。別に第3世代ということでなくても良いのだが、津波の話もあるし、今日的な淀川の実際の住民のニーズ（どういうまちにしていきたいのか、どこに課題があるのか）をもう一度明確にした上で、今やっている活動の中で位置づけて、その文脈の中でメリハリをつけてさらに活動を発展させていって欲しい。

特定非営利活動法人旧御師丸岡宗大夫邸保存再生会議

御師邸に「実験プロジェクト」の形で声がかかって私も伊勢に行ってきた。いつも内宮にだけ行っていて外宮には 1回も行っていなかったこともあり、背中を押されポジティブな思いになり、伊勢の文化を味わってこようと思った。先ほどのオーナーさんの思いというところでいうと、丸岡邸のご子息が現役で継いでいる。よし、俺のときになんとかしよう、まずは実態がどうなっているのかを明らかにしなくてはならない、調査しなくてはいけないという責任感のもと、沢山ある所蔵品を調査するため何年もかかるのでそれをぼちぼちはじめた。その傍ら、その屋敷の道路側に人が集まるスペースを掃除をしてつくって、この運動や調査活動が発展する基礎をつくろうと、やっとスタートしたところだと思う。このようにオーナーさんが自らしょってきたものを、外に開放して、調査をしてもらい、そしてその意義を確認していく。そして先ほど報告された方のようにしゃべりも相当うまい。そういうツワモノ達が 10人くらい集まって活動している。驚いたことに何が一番モットーかと聞いたところ、皆さん1日に2時間以上は仕事をしないのだとか。朝日座の場合もそうだが、「守る会」という名前ではなく、「楽しむ会」となっている。ずっと担ってきたものを公開し調査するなかで、あまり頑張って短期間に全部やってしまうのではなく、価値はありそうなので、なんとかオーナーさんが責任を持ちながら、まわりがサポートしながら、且つ実際には市役所などいろんなネットワークでつながっていて、工夫しながら徐々にネットワークができてこれから発展していくだろうと思う。ただ、前段では選考委員の間で本当に大丈夫かと話しあったこともあり、私も不安だった。しかし、選んでよかったと思う。



矢郷恵子氏　KOPA 代表　毎日の生活研究所代表

蛸と芋についてコメントをさせていただきます。この 2 つはプレゼンの仕方や雰囲気は違いますが、私なりに共通している点があると感じました。

両方グループとも、活動の場所づくりは終わっていて、これからそれをどう広めていくか、運営していくかというところにきていること。もう一つは、他の団体とも同じですが、みんなが「この町で暮してよかった」という場所を育てていくというその 2 点が共通しています。

特定非営利活動法人蛸蔵

藁工倉庫が 13 棟もあると聞いて大変なプロジェクトだと知りました。椅子１脚のために、４つの団体の意見の違いがあったという報告があり、本当にここまでくるのに大変だったことがわかりました。

が、これからはもっと大変だということも伝わってくる。場所は作ったが、どのように運営維持していくかを進めていかなければならない。集客や人集めを活動の中心にしていくと「自分たちは何をしたかったのか」と悩んだり、迷ったりすることにぶつかると思う。

迷った時は、自分たちは本当は何がしたいのか、７世代にわたる島の心を掲げたという報告がありましたが、もう一度、自分たちが心からどんなことをしたいと思っていたのか、そこに立ち戻っていくことが必要だと思う。集まった人たちが、楽しんでやれるようなことをしないと続いていかないので、そのことに対する知恵や工夫も必要になっていくと強く感じました。 ここまでの歩み、本当にご苦労さまでした。高知にあのような場所が出来ること、とても楽しみです。

おいもを愛する会

まちづくりはリーダーの人柄がその活動のスタイルをつくる、ので大事です。この活動は、ただの芋畑を「ラブステーション」と呼べる谷脇さんの図々しさやプレゼン力がすごく大きい。もう一つは、テーマの「芋」が単純でいい。「今から芋掘ろうか?」「明日、芋堀りにいこうか」「お芋をみんなで食べよう」それだけの言葉で人が来る。そのような単純明快なことを、もっともらしくやってしまう。「何かありそうだ」という風に思わせるつくり方がすごくうまいと思った。

全国に広がっているけれど、一つの課題は芋畑をあちこちにつくり「どうしたらいいか?」と悩む人が出てくると思うこと。芋を育てることが目的だったのか、芋を通して人やまちを育てることが目的だったのか？毎年たくさんできる芋をどうしていくのか？事業化は難しいことや悩むこともあると思うので、自分たちが何をやりたかったのかに常に立ち戻る。芋を育てることで、子育てする人たちの交流や絆を深めることが目的なら、私は単純にそこに立ち返って何気ないまちづくりを進めていくことが大切だと思います。

そういうことを感じる２つの団体でした。

今日、神楽坂のまちを歩いて「まちを歩くのはいいな」と思いながら、私たちはギリギリのものを観ているという心の痛みも感じました。震災後で、火災や災害に強いまちをつくるという話になった時に、本当にこのまちは残っていくのだろうかと考えてしまう。そういうギリギリのものを守って、保全していくのはその地域に住む人や市民の力なのだと各団体の報告を聞きながら改めて感じました。

選考委員のコメント



手嶋尚人氏　東京家政大学准教授

この助成事業の第1回、第４回の助成を受けている「谷中学校」に参加していた手嶋と言います。その縁でこの場に立たせていただいていると思います。報告を聞いていて、19 年前とは全然違うなと感じました。当時は、まちづくりという事自体が分からずにやっていましたし、行政との関係を大事にしないとできないという感じがしていました。今日聞いていると、自分たちが主役としてやっていこうという、市民の強い意志を感じました。私たちの時代は使命感でやっていたところがある様でしたが、皆さんを見ているとミッションをそれぞれ持ちながら、しなやかに楽しんでやっている。そこが非常に面白く、どんどん広がっている感じがして良かったと思います。特に、おいもの発想はなかなか自分には思いつかないし、あの発信力はすごい。今日はそれに代表される形が多くあったのかと思います。

今日コメントを担当することとなっている「もちなが邸」と「島の風」の発表者の方は、非常に個性的でそれぞれ違うインパクトの強い発表であったと思います。

特定非営利活動法人手仕事舎 そうあい

私自身が建築設計をやっているのでわかりますが、古民家は難しい。いつまでも手がかかっていくものです。しかし、その大変さを超え、とても場所の魅力があります。人がだんだん集まってくるというところがあります。それでも、核になる人がいても、ネットワークが広がらないと厳しい。子どものお母さんのネットワークの参加があったのは良いことだし、まちづくりは、楽しく若い人に発信できるのが非常に重要です。蒲生さんの強い意志があって、みんながついてきて、場所があって、ますます町の中心になっていけるのだと思います。それにしても、私費の投資は半端じゃないですね。

特定非営利活動法人島の風

島の風は報告書だけでは分からない強い意志を感じました。今のまちづくりでは、これまでの経済第一的な考え方から住む人がいかに楽しむか、豊かな生活をしていくかという方向へシフトしていくことだと思います。それを一番遠い島（小指）から発信していくことは非常に重要だと共感しました。

島の逆襲は、今の世の中の価値観を変えていくという意味で重要なことだと思いますが、ただ、少し内容が難しいのかとも思いました。コンセプト・目的をいかにわかりやすく、若い人に伝えていくかが大切です。既に実践されているようですが、しまあかりや農的体験など、あまり専門的なところじゃないところの楽しみが必要。まずは島民が楽しむために、外の人がちょっと刺激を与えてくれるというようなやり方が、これからも出来れば良いのではないかと思います。





選考委員のコメント



神吉紀世子氏　京都大学教授

特別助成対象団体のコメントを担当しますが、選考委員就任 2 年目で日が浅いので、当初どのような評価において対象団体が選ばれるに至ったのかは存じ上げない。発表と報告書からの印象でコメントさせていただきます。

「住まいとコミュニティづくり」という助成事業だが、住まいというスケールはどこかに吹っ飛んでいる印象も。コミュニティづくりに力がそそがれているようにみえる。何年も続けて苦労もありながら、今の実績に至る話をお聞きして、現代の社会そのものを変えようとする活動だなと感じた。勿論、住まいや住環境がベースではあるが、それらを拠点としつつも世の中そのものに対して、ある種の「次の時代」を訴えかけているのだということが印象に残った。

それぞれテーマは違うが、関係されている方個々人の人生、エネルギッシュに取り組む動き方、さらには、他のチームとも連携行動しないといけないので集団・組織のスケールになったときの動き方を追求し、且つ世の中に対する訴えをしなくてはならないから、本当にたいへんだろうと思う。3 チーム三様に、エネルギーの基になる世の中に対する、何か「怒り」のようなものも感じた。日常スケールでの仲間が増えた、というスケールを超えて、現代社会という大きなスケールに対して向っていくというこの持続力が、ここで取り組まれている「コミュニティづくり」なのだと感じた。つまり「コミュニティづくり」とは、様々な人々や集団が現場のスケールで培った力をもとにして、より広いところに向かって、次の時代はこうあるべきだということを、訴えつつ、現場のスケールにおいて具体像を実現させるように動くことなのだと感じた。

ここに集まった機会を通じて、色々な団体の動きが次の展開につながるのが大事だと思う。今日はほとんどの方がここで口頭では言ってもいいですよね、と実は報告書ではあまり書かれていないような踏み込んだ話をされた。顔と顔を突き合わせて実際に「話」として語られるときに活動の勘所みたいなものは、この場所に集まるからこそ掴めるもので、それらが次の団体の活動にも伝わっていくことが、この交流会の大変すばらしいところだと思った。

特定非営利活動法人街なか映画館再生委員会

映画の文化遺産が危機的な状態であるということを教えていただいた。間近に激変の時期が来ることがわかったし、それを含めて次の時代に文化をどの様につなげていくのかということを問うている。そして、様々な力を結集して動いていくことが、危機を乗り越えて、さらに面白い次の時代を作るということだ。

特定非営利活動法人グローバルヒューマン

琵琶湖の湖西で拠点をつくられた生活困窮者との活動は、その活動自体が社会的な問題に対するある種の解答の提示をめざして行われていると思う。

白保村ゆらてぃく憲章推進委員会

若い世代の就業機会が厳しい中で、個人の人生とコミュニティの話がちゃんと動けば、事業や生業が成り立つのだということを提起されているのだと思う。社会の次の姿を見せていくということ自体が、皆さんが目指されている活動であり、しだいに大きな活動の拡がりになってきていることを印象深く聞いた。

総評

鈴木輝隆氏　江戸川大学教授



この助成金の面白さは、各県各地域での応募ではなく、全国から252件の多くの応募があったこと。今日の集まりに参加すると、今の日本の状況が概観できると紹介した。今、日本はどうなっているだろうなということを考えるときに、マスコミやソーシャルメディアだけでは分からない。こうした現場活動の発表の場に参加するとリアルに見えてくる。

私は色々な地域、そして被災地を歩いた。東京でも地方でもそうだが、自滅思考・自殺思考の声が聞こえる。若い学生も就職が決まらないからなど暗い話が多い。

「おいもを愛する会」では領収書をもらうときは、恥ずかしいなどという話があった。地域でユーモアをもって語られると面白い、何かあるのではないか、何かできるのではないか、行ってみたくなるし、活力を感じる。絶望の反対にはユーモアがある。絶望や自滅にあるのは、妬みや嫉妬。色々な話を聞いている中で「東京は良いじゃないか」とか、「お前のところは元々資源があるからな」という妬みや嫉妬がある。そこから語られてしまうと、引いてしまう。252件の助成申請で、自分のところが正しい、一番すばらしいというのは当然だが、申請にユーモアや寛容さ、地域愛を感じると、応援すればよくなるのではないかと選考委員は感じる。自滅思考や嫉妬や妬みだけでは、次の時代は出てこない。

選考委員の皆さんの中で共通しているのは、「新しいことを否定しない」こと。今日の話は、新しいものは何なのか…古いものの中に新しさがある。日本の中で不思議なことが起こっている。そのような変化の兆しを見つけると、選考委員は応援したいなと思う。「未確認飛行物体見つけちゃった!」というのが好きで、私財を投げ打って応援したくなる選考委員もいる。世の中の枠にはまった常識ではなく、嫉妬や妬みではなくて、本当にユーモアのある不思議な世界、アートも含まれていて、未来を覗いてみたくなる、共感できるものがあるのではないかと思う。

日本の公共の課題をどのように楽しく解決するか。お金だけでは解決できない。私のみつばち先生展をご覧になった、景観学の権威である東京工業大学名誉教授の中村良夫先生が、「まちづくりはいままで工学的な景観デザイン優先で、人間的といっても非人称的な人間を考えていましたが、いまや具体的な人称的市民の刻印のおされた、まちづくりが大事だと思います。」とおっしゃってくれた。不特定多数ではなく、個人個人が、魅力的で楽しくて、不思議なことをやっていくことがまちづくりではないだろうか。「街なか映画館再生委員会」の話にしても、個人個人が楽しんでいて、固有名詞の時代がはじまった。まちづくりが変わったといわれるのは、不特定多数から個人の不思議な生き方、嫉妬や妬みではなくて、むしろユーモアを持ってやっていくことになってきているからではないか。「おいもを愛する会」は象徴的で、妬みを買わずに色々な人とつながっている。おおらかな寛容性のあるつながりを日本人や世界の人が求めているのだと感じた。金融危機など世の中には様々な不安があるが、豊かさとはもっと違うのではないかと教えられた。

「新田まちづくり運営委員会」でも、良いことはすぐにやってしまおう!という行動力はすごい。選考委員は知識を求めるが、知識と経験は相性が悪い。知識で考え予測してしまうが、それ以上に現実には不思議なことが起こっている。来年も皆さんが助成事業に申請する際には、常識を少し超えるような不思議なことを考えていかないと、日本の閉塞感が破れないのではないか。今日の発表を聞いていて、そのような日本が見えた気がする。

実験プロジェクトで伊勢の御師邸に行ったが、「古い建物を掃除しなければ人が入ってこない、人が内部に入れないと中を見てもらえない、イベントをすると参加者たちが担う人になっていく。」このように掃除から始まっていくところから見せてもらうと、掃除からズルしないまちづくりというのがわかってくる。パンフレットの掲載文を読んでみると、そのようなことが分かってきて、経験と知識が少し一致してきた。

これから私も未確認飛行物体を見つけたい。不思議な楽しい個人の活動がある日本、ここから再生の活力が生まれることを信じたい。